

2006年に実施したブラジル日系農協調査の結果から得た結論として、果実類の団地やセラードなどの穀類の団地は1994年の2大日系組合の崩壊後も成長していたが、全日系農協のうちの3分の1を占めるサンパウロ市近郊(300km圏内)の農協は他の地域の日系農協と比較して事業規模が小さいという特徴があることがわかった。そうした近郊の日系農協やコロニアは、花卉、野菜、果実類など集約的な農業を行っており、主に国内市場向けの農産物を生産していた。こうした国内マーケットをターゲットにしている農家は、農産物価格は伸び悩み、資材価格は上昇するという傾向のなかで徐々に利益率が低下していくという問題に直面している。大豆など輸出商品は国際相場で価格が決まり、金融危機までは価格は上昇基調にあった。そしてそれに引っ張られて、肥料や農薬の価格も上がっていく。こうした状況が続けば、近郊農業の衰退が懸念される。

ところでブラジルは貧富の差が大きいといっても、サンパウロ市内にはそれなりに中間層が存在する。中間層をどのあたりと考えるかは難しいところだが、例えばサンパウロ市内には最低賃金の5倍～10倍のサラリーをもらっている人口は、約73万人(2000年IBGE)、10倍～15倍のサラリーをもらっている人口は33万人足らずいて、しかもサンパウロのサラリー別人口区分から見ると最も厚い層をなしているのである。そして5倍～10倍のサラリー層の平均手取り収入は、1,302リアル、10倍～15倍層は2,093リアルと推計し、これらの層が1ヶ月に支出するレジャー費をおよそ80リアル～200リアル程度と推測した。こうした人達は、1回のレジャーにつきこの程度の予算で土曜、日曜といったどこでレジャーにいそんでいるのだろうか。映画?ショッピング?それとも近くの海岸?常々私はサンパウロ市内に、中間層が楽しめるレジャーが少ないと感じていた。こうした都市中間層に手軽に楽しめるグリーン・ツーリズム(Turismo Rural)を提供し、農村との交流を通じて地域農業を理解を促し、農産物の価値を知ってもらうことはできないだろうか考えたのである。

そこで思いついたのが日系コロニアへのグリーン・ツーリズム(Turismo Rural)であった。日系コロニアにはどこもブラジル農業に貢献し、地域農業を発展させてきたという素晴らしい歴史があり、それをもグリーン・ツーリズムの付加価値とすることはできないだろうか。そして、日系コロニアに観光客を誘致し、直接農産物を買ってもらうことができれば、直接の経済効果もあるし、観光客が来ることは、間接的な経済効果も大きいといわれている。

そうしたことから、簡易な日系コロニアの農業や歴史、地理、見所、行き方などを書いた冊子をつくってみてはどうか考えたのである。さらには、今後、農業ビジネスで訪れる皆様がブラジル日系農協・農業を理解する上で活用願えれば幸甚である。そうしてこの冊子が各コロニアの皆様が各々の地域を見直し、活性化のきっかけとなればと願っている。

また、今回は2006年に農協調査を実施したコロニアのみを掲載したが、今度はもっと多くのコロニアについても掲載していきたいと考えている。是非とも皆様からも情報、ご意見、ご感想をお寄せいただければと思う。今後とも日系コロニアの皆様、読者の皆様にはご指導ご鞭撻を賜りたくお願い申し上げます。

なお冊子の作成には、沢山の方々のご支援ご協力を頂いた。ご支援ご協力を頂いた皆様に心より感謝申し上げます。

2009年3月

IPTDA-JATAK情報部